異文化間コミュニケーション能力育成からみた高校英語教科書分析

後　藤　善　久

0．は　じ　め　に

国際化が急速に進む現代、文化背景の異なる人々と相互理解を図るために、コミュニケーション能力の向上が必要不可欠となっている。国際化に対応し、日本人の異文化間コミュニケーション能力を育成するために、学校教育が大きな役割を担っていることは言うまでもない。特に、学校教育としての外国語教育が、異文化間コミュニケーション能力育成のために果たさなければならない役割と、その指導内容及び指導方法を客観的に検討しなければならない。異文化間コミュニケーション能力の育成が現行の教科書を用いて実現可能なのか、不備な点はないのか等の問題を議論する必要に迫られていると言える。

本稿では、以下の３つの目標を中心に、これからの英語教育を検討する。

① 異文化間コミュニケーションに要求される能力を体系化・項目化する。
② 体系化された重要項目を基に高校英語教科書を分析する。
③ 英語教育の問題点と効果的指導法を考察する。

1．異文化間コミュニケーション能力の項目化・体系化

1．1　項目化・体系化の必要性

外国の人々との交流が益々盛んになっているにもかかわらず、相手とうまく意志疎通できずにいる日本人が多い。コミュニケーションと文化は不可分のものであると言われる。その理由は、人は自文化の影響を受けながら、コミュニケーション活動の形態を学び取るからである。従って、文化が異なればコミュニケーションの形態も異なってくる。すべての文化はその文化の構成員に対して、適切なコミュニケーションの形態と不適切なコミュニケーションの形態を規定しているのである。では、異文化の人とのコミュニケーションを成功させるために私達は世界中のあらゆるコミュニケーションの形態を学習しなければならないのだろうか。しかし、私達が接触するすべての文化に対し、そのコミュニケーションの形態をすべて学習することは不可能である。

では、これまでの国際交流の歴史において日本人か経験してきたいくつかの失敗談を学習することで、異文化間コミュニケーション能力の向上が可能であろうか。この逸話的アプローチ（anecdotal approach）は有用である一方、いくつかの問題が指摘できる。まず、逸話の中の情報が異文化間コミュニケーション能力の向上に関連してどれほど重要なものであるか、またその情報がコミュニケーション能力教育の中でどのような位置付けがなされるのかの判断が困難であることが挙げられる。更に、コミュニケーション能力は短期的に習得できるものではなく、長期的・段階的に発達するものである。もし具体例のひとつひとつが無規則・無機質的に与えられていたのでは、学習内容に偏りが起きたり、バランスのとれた総合的な異文化間コミュニケーション能力の習得が妨げられる恐れも出てくる。

このような観点から、異文化間コミュニケーション教育を効果的に行うためには、異文化間コミュニケーション能力向上のために習得すべき重要事項を項目化し体系化することが最優先課題であると思われる。

1．2　異文化間コミュニケーション能力向上のための3条件

異文化間コミュニケーション能力を身につけ、異文化間の相互理解を深めるためには、次の3つの条件が必要であると思われる。

① 異文化交流に対する積極的態度
② 自文化と異文化の特性に関する知識と理解
③ 実際的な異文化間コミュニケーション技能

円滑な異文化間コミュニケーション活動は、態度面、知的面そして技能面の3局面が立体的に作用して初めて可能であることを、この3条件は示している。異文化間コミュニケーション能力向上の条件として3つの柱を設定したことは、高等学校学習指導要領に掲げられている外国語科の目標が態度、知識、技能の3要素から成立していることに呼応するものである。外国語の目標は次のように設定されている。[1)]

① 外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること。
② 言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深めること。
③ 外国語を理解し、外国語で表現する能力を深めること。

次節では、異文化間コミュニケーション能力向上のための3大条件を習得させるために、更に具体的に何を指導すれば良いのかを考察する。

1．3　異文化間コミュニケーションにおける6つの障害

1．1節で述べたように、私達はあらゆる文化のコミュニケーションの形態をすべて習得することは不可能である。それと同じように、私達が接触するあらゆる文化に対して、そのひとつひとつの文化に適応した態度・知識・技能の3要素を習得させることは困難である。この理由から、Jandt（1995）は、異文化間コミュニケーションの障害となるものをより一般的なレベルで考察するほうが妥当であると主張している。異文化接触において一般的にみられる大きな障害として、Barna（1994）は、① 不安、② ステレオタイプと偏見、③ 相違点ではなく類似点を仮定すること、④ 自民族中心主義、⑤ 言語の相違、⑥ 非言語の相違の6つを挙げている。以下、この節ではこれらの6つの要素がなぜ異文化間コミュニケーションの障害となるのかを順番に見ていく。

1．3．1　不安（anxiety）

外国に行ったり外国人と交流する時に、どのように行動すれば良いのかわからないことによって引き起こされる不安が第1の障害である。人は不安を軽減するために、他人との接触を避けたり、相手に対する敵意などの防御形態を取ることが多い。他人との接触を避けていたのでは円滑なコミュニケーションは成立しないことは当然である。

1．3．2　ステレオタイプと偏見（stereotypes and prejudice）

ステレオタイプと偏見は、先入観や前もって形成された認識や態度に基づいて、人間集団やその集団に所属する個人を判断する事を言う。ステレオタイプや偏見が強烈であると、その持ち主は嫌いな集団や個人に対して、あからさまな批判や差別の行動あるいは排他的な行動を取ってしまう。これでは相互理解どころか、異文化間の交流自体を妨げることになってしまう。

1．3．3　相違点ではなく類似点を仮定すること（assuming similarity instead of difference）

世界のすべての文化は、多くの共通の特徴を共有している一方で、それぞれに異なった習慣、思考、行動パターンをもっている。例えば、何がよくて何が悪いか、あるいは何が正しくて何が誤りであるかの判断の基準となる価値観も文化によって異なる。もし私達が、自国の文化と他のあらゆる文化は類似していると仮定し、他国でも自国と同じように振る舞うならば、その行為は誤解を招きかねない。また、自分自身の文化的前提によって相手の行動やメッセージを解釈しようとするならば、異文化理解の手掛かりは見失われ誤った判断を下してしまうであろう。文化の相違を仮定することによってこそ、現実を客観的に解釈し反応することが可能となる。従って、異文化間コミュニケーションにおいては、文化の多様性に対する知識と理解が重要な項目となってくる。

1．3．4　自民族中心主義（ethnocentris）

自民族中心主義は他国の人の行動を自国の文化の基準で評価したり、自国の文化が他の文化よりも優れていると判断することである。自民族中心主義の例として Jandt（1995）が取り上げている、スペインなどでみられる siesta（昼寝）の習慣を考えてみよう。この習慣は、最も気温の高い午後の時間に体を休めてエネルギーの消費を抑えようとする賢い習慣である。この事を考慮せずに、昼寝は怠惰な人間のすることだと判断するのはまったくの誤りであり、独断的である。自分たちの文化が正しく、最も適切で正常だと考えている人間が、異文化の人々と理解しあえるはずがない。

1．3．5　言語の相違

言語の相違が円滑なコミュニケーションの障害になることは、外国人と会話をしたことのある日本人ならほとんどだれもが感じていることであろう。適確な語彙が見つからなかったり、文法を言い違えたりなどして相手に誤解を与えたり、イディオムやスラングの意味がわからずに相手の言うことが理解できなかったり、誤った解釈をしてしまうことが頻繁に起こる。そのような言語の形式的構造の違いに加えて、相手に対して何を言い、そしてそれをどのように言うか、つまり表現スタイルが文化によって異なることを理解していないことが、異文化間コミュニケーションの障害となっている。相手に名前で呼びかけるという単純な行為でさえ、ファーストネームで呼ぶか、敬称を付けて呼ぶかなどの選択があり、それらの選択はすべて、自国の文化によって決定されていることに気づくことが、非常に重要である。

1．3．6　非言語の相違

人間のコミュニケーションにおいて、言語が占める割合はわずか 30％であると言われる。その残りの 70％は非言語的メッセージを通じて伝達されているのである。従って、コミュニケーション活動の中で非言語的行動はとても重要な役割を果たしている。非言語的メッセージは、Jandt（1995）では次のように範疇化されている。

・サインとシンボル（signs and symbols）
・空間と距離（proxemics）
・身体の動き（kinesics）
・時間（chronemics）
・パラ言語（paralanguage）
・沈黙（silence）
・接触（haptics）

・衣服と外観（clothing and physical appearance）
・匂い（olfactics）
・視線（oculesics）

これらの非言語的メッセージが異文化間コミュニケーションの障害となるのは、非言語的メッセージが、異なる文化の中では異なった意味を持ち得ることに気づかず、非言語活動は普遍的なものと考えてしまうことに原因がある。人差し指と中指で作るVサインは、アメリカ合衆国では勝利や平和を意味する。ところが、ある文化ではそれは単に「2」の意味しか持たないし、手の甲を相手に見せたVサインをすると相手を侮辱した卑猥な意味になる文化もある。

1．4　まとめ

この節では、異文化間コミュニケーション能力を向上させるためには、習得すべき能力を項目化し体系化する必要があることを論じ、6つの障害を重要事項として設定した。6つの障害は1．2節の態度・知識・技能の3条件の観点から、下のように体系化できる。

3条件	6つの障害
態度	不安 ステレオタイプと偏見
知識	相違点ではなく類似点を仮定すること 自民族中心主義
技能	言語の相違 非言語の相違

2．高校英語教科書分析

2．1　6つの障害による分析結果

第1節では、異文化間コミュニケーション能力向上のために習得すべき重要事項を項目化し体系化した。この節では、これらの重要事項が現行の高校英語教科書で指導可能かどうかを考察していく。以下、6つの項目（障害）が、それぞれどのように教科書で取り上げられ論じられているかを検討する。先に述べたように異文化間コミュニケーション能力育成は長期的・総合的視野に立脚した指導が要求されるので、ある教科書を使用した時、その教科書の内容からどの項目を学習できるのかを把握しておく必要がある。従って、いくつかの出版社から出版されている英語教科書を、重要項目の観点から分析した結果を一覧表にして示しておく。

2．1．1　不安

Spectrum Ⅰ（L.1）では、文化的障害を克服するためには、失敗を恐れず一所懸命努力することが大切であると述べられている。たとえ食事の作法など知らなくても、悲しく思ったり、気まずく思うことはないなどの内容が取り上げられている。Powwow Ⅰ（L. 3）でも、完璧な英語を話す必要はなく、言い間違いを気にせず積極的に話に参加すべきだと述べられている。World Ⅰ（L. 4）は、カルチャーショックの原因とその克服法を扱い、積極的な態度と柔軟性の必要性を述べている。その他、不安を取り除き積極性を育成する題材として、国際交流と異文化体験の意義と重要性を説く題材が見受けられる（HorizonⅡ（L. 1）Horizon R（L. 2）CreativeⅡ（L. 11）等）。

表1 [2)]

	不　安	ステレオタイプと偏見	類似点と相違点	自民族中心主義	言語の相違	非言語の相違
Horizon	Ⅱ, 1 R, 2	Ⅱ, 9 R, 4	Ⅰ, 6 Ⅱ, 2 R, 7	Ⅱ, 7	Ⅰ, p50~p51	Ⅰ, p74~p75
Creative	Ⅱ, 11	Ⅰ, 6	Ⅱ, p44~p52	Ⅱ, 1	Ⅰ, 2 R, 6	R, 3
Milestone	Ⅰ, 2	Ⅰ, 11	Ⅰ, 2	Ⅱ, 10 Ⅱ, 12	R, 1	Ⅱ, 3 Ⅱ, 7 R, 1
Powwow	Ⅰ, 3	Ⅱ, 3 R, 10	Ⅱ, 3	Ⅰ, 1	R, 10	
Spectrum	Ⅰ, 1	R, 14	Ⅰ, 8	R, 15	R, 2	R, 1
Royal			R, 7	Ⅰ, 10 Ⅱ, 13	Ⅱ, 2	Ⅱ, 11
New Age	Ⅰ, 1			Ⅱ, 11	Ⅰ, 13	R, 3
One World	Ⅰ, 4	Ⅰ, 6	Ⅰ, 8 Ⅱ, 12 R, 4		R, 4	Ⅱ, 7

2．1．2　ステレオタイプと偏見

偏見による差別行動や排他的行動の典型例として、アメリカ合衆国での人種差別、特に黒人差別の話題が多くの教科書で取り上げられている。Horizon R (L. 4) は、イタリア系移民として差別されいじめられる少年の体験により、人種や習慣の違いを恐れたり恥じたりする行為、またそれにより人を差別する行為の愚かさを論じた教材である。日本での外国人に対する偏見を取り扱っているのは Powwow Ⅱ (L. 3) で、日本人は欧米人以外の外国人を差別する傾向にあることが述べられている。

2．1．3　相違点ではなく類似点を仮定すること

日本文化と他の文化の相違を理解させるために、外国人の目には日本文化がどう映るかを紹介している教材が多く見られる。Horizon Ⅰ (L. 6) や Creative Ⅱ (p44～52) は日本の食習慣を、World R (L. 4) は公共の場でのマナーの違いを取り上げている。Milestone Ⅰ (L. 2) と Royal R (L. 7) では、日本人の高校生や大学生は自立心や独立心が足りないことなどが論じられ、World Ⅰ (L. 8) では、日本で重視される先輩・後輩の関係について述べられている。

2．1．4　自民族中心主義

自文化あるいは自国を中心に世界を知覚し認識する傾向にあることが、どの国も自分の国を世界地図の中心に配置することから理解できる。各国の世界地図を紹介しながら自民族中心主義を論じている教材が見られる (Powwow Ⅰ (L.1) Creative Ⅱ (L. 1))。また、日本人の自民族中心主義を論じた教材も多く見られる。日本人は自分達は世界の他の民族とは異なる特異な存在だと考え、この誤った考え方が日本人の閉鎖性及び排他性の原因になっていると、Milestone Ⅱ (L. 10) Spectrum R (L. 15) Royal Ⅱ (L. 13) で述べられている。

Milestone Ⅱ (L. 10) の中で指摘されている、日本人に典型的に見られるが、しかし誤った4

つの考え方は特に異文化間コミュニケーションの障害となる重大なものであるので、下に引用しておく。

① Foreigners can't eat certain types of Japanese food.
② Japanese are specially sensitive to nature.
③ Japanese is too difficult for foreigners to learn.
④ Japanese are unique because they are homogeneous.

2．1．5　言語の相違

第1節で述べたように、相手に対して何を言い、そしてそれをどのように言うか、また相手の質問にどのように答えるか等の表現スタイルが文化によって異なることを理解することが、円滑なコミュニケーションを行うためには不可欠である。日本人同志が交わす会話では日常よく使われる普通の言語行動であるにもかかわらず、文化背景の異なる外国人との会話では誤解を招いたり、失礼にあたる表現として次のような例が教科書で取り上げられている。

Ⅰ．謙遜表現

・自分や自分の家族、自分の所有物をけなす
"My wife is not beautiful, and she can't cook very well. But I hope you'll come."（妻はきれいでもないし、料理も上手ではありません。でも来てくれるとうれしいな。）(Spectrum R (L. 2))

Ⅱ．遠慮した言語行動

・食べ物のおかわりを勧められたときに遠慮して、"No" と言う
"The coffee is very delicious but please do not trouble yourself."
（コーヒーはとてもおいしいけど、お構いなく。）(Milestone R (L. 1))

・すぐ謝罪する
"I'm sorry."（すみません。）(New Age Ⅰ (L. 13))
"I have no excuse."（申し訳ありません。）(World R (L. 4))

Ⅲ．失礼にあたる（プライバシーの侵害になる）質問や話題

・身体的特徴に言及する
" You' re getting fat, aren't you?"（太ったんじゃない。）(Powwow R (L. 10))

・宗教に触れる
"You must be a Christian."（あなたキリスト教徒でしょう。）(Powwow R (L. 10))

・個人的ことがらに触れる
Where are you going?"（どちらへ。）(Royal Ⅱ (L. 2))

2．1．6　非言語の相違

1．3．6節で述べた数種類の非言語的メッセージの中で、ほとんどの教科書で取り上げられているのが「身体の動き」、いわゆるジェスチャーについてである。次いで「空間と距離」についても半数の教科書で扱われている（Milestone Ⅱ (L. 3) Spectrum R (L. 1) Royal Ⅱ (L. 11) World Ⅱ (L. 7))。これらの教材により、非言語的メッセージの重要性、機能、文化的相違、またその文化的相違による誤解や摩擦を理解させることが十分可能であると思われる。

しかし、「日本人」の異文化間コミュニケーション能力向上を目的とした時には、「日本人」が他文化の人と交流する時に誤解を引き起こしそうな非言語的メッセージに言及するほうが、より効果的であると思われる。New Age R (L. 3) では、同じようなジェスチャーでありながら日本

と米国では意味の異なるものとして、人を呼ぶときの手の動き（米国では人を遠ざける意味）、お金を意味する手の形（米国では“OK”の意味）を紹介している。また、日本人に特有なジェスチャーとして、「ちょっとすみません」あるいは「ちょっと通して下さい」を意味する手刀を上下させる動き、顔の前で手を左右に振って［ごめんなさい」を表現する動きも取り上げられている。

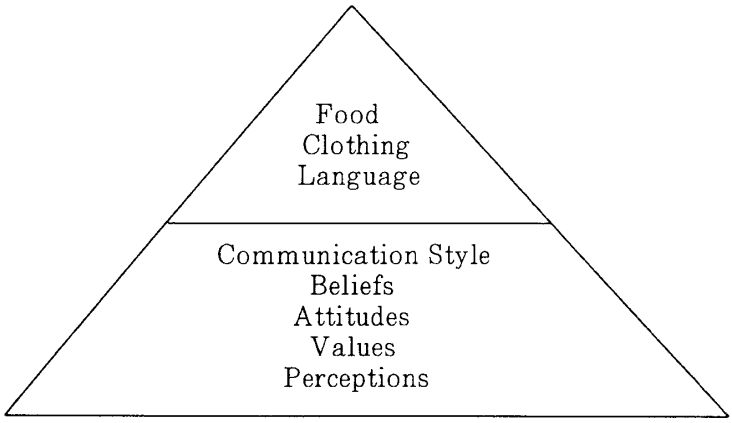
ジェスチャーの他に、日本人が注意しなければならない非言語的行動として、時間、沈黙そして視線がある。海外に住む日本人にとって、現地に適応する際の大きな障害は、現地での生活のペースの問題がある。日本文化では迅速性・時間厳守が重視されるが、時間は絶対的なものではなく、人を拘束するものでもないと考える文化も存在する。この時間に対する認識の相違を、Milestone Ⅱ（L. 7）が取り上げている。沈黙に関しては、日本文化では沈黙を尊敬、同意、礼儀正しさと解釈するが、欧米では、発言しないで沈黙している人は、無責任、無能、無礼に見られてしまう。視線に関しては、米国のようにアイ・コンタクトを重要だと考える文化がある一方で、日本のように、人の目を直接見つめるのは、特に目上の人に対しては、無礼にあたると考える文化もある。従って、米国人は、日本人のアイ・コンタクトを避ける行為を、不注意、興味の欠如、よそよそしさの意味に誤って解釈してしまう。このような沈黙や視線に対する解釈の相違が、Milestone R（L.1）で述べられている。

2．2　高校英語教科書の問題点—自己のコミュニケーション形態評価に関して

この節では、2．1節での分析結果から、現行の高校英語教科書の問題点を指摘する。異文化間コミュニケーションを成功させるために私達は、異文化の人々と交流する際、自分は6つの障害をクリアし、適切なコミュニケーションを行っているか、それともいずれかの点で誤った行為や誤った判断をしてはいないかなど、常に自らのコミュニケーション形態を、（自分の属する文化のコミュニケーション形態を含めて）、評価する必要がある。自らのコミュニケーション形態を知ることの重要性を、サモーバー他（1983）が「己を知ること」として論じているが、6つの項目それぞれについて自己を評価し、（例えば、自分の異文化交流に対する態度を評価する、自分の価値観や自文化の特徴を理解する、自分の自民族中心主義の程度を知る、自分の言語的・非言語的行動の特性を知るなど）、自分のコミュニケーション形態の実状を知れば、自分の欠点、相手に誤解を与えそうな言動を発見でき、それを改善するため努力することが可能となる。自己を評価し、多種多様な異文化接触に適応する力を育成することが、異文化間コミュニケーション能力教育の最終的かつ最大の目標である。

では、現行の高校英語教科書で、自分のコミュニケーション形態と、それに大きな影響を及ぼしている日本文化のコミュニケーション形態を評価する方法を習得さることが可能であろうか。不安、ステレオタイプと偏見、自民族中心主義については、この「己を知る」作業は比較的容易に行うことが可能である。具体的には、教科書の中で黒人差別が取り上げられているときには、日本人は欧米人以外の外国人に対して、偏見を持ち差別する傾向にあることを指摘し、自分自身はどうなのか、自分も同じような傾向にあるのかを考えさせることができる。自民族中心主義についても、2．4節で引用した日本人に典型的な4つの考え方が自分に当てはまるかどうかを評価させることが可能である。

しかし、自分の文化（価値観）の特徴、自分の言語形態の特徴、自分の非言語形態の特徴を評価することは、その特徴を判断する観点が分からなければ、非常に難しい作業であると言える。Levine ら（1987）が論じているように、文化は氷山に似ていて、姿を現しているのはほんの一部で、後の大部分は目に見えない。



衣服や食文化の違いはすぐ認識できるが、文化の隠れた部分を認識しその特徴をとらえるためには、どこに目を向けるべきなのかを知らなければ、文化の最も重要な部分を簡単に見落としてしまい、最悪その存在すら気がつかないことも起こってくる。自分自身、自国、他国の文化パターンを評価する観点を明確に示している教材は少ない。これが、現行の高校英語教科書の最大の欠点であると考える。

3．文化の特徴を分析するための観点

文化の特徴を分析するための観点としてどんな項目を設定すべきかが、これまでいくつかの論文の中で論じられてきた。[3] 本稿では、日本社会で支配的な文化パターンを理解するのに有効であると思われる観点として、① 個人主義－集団主義、② 平等主義、③ 高コンテクスト－低コンテクスト、④ P時間－M時間、⑤ 親密性の5つを設定する。[4] 以下、これらの観点によって、どのように文化（特にコミュニケーション形態）の特徴がとられられるのかを論じる。また、自分のコミュニケーションの形態を分析させるために、授業では具体的にどのような内容を提示し、どのような活動を行わせるべきかを考察する。

3．1　個人主義 vs 集団主義

個人主義の文化は、集団の権利よりも個人の権利を優先させ、集団の利益よりも個人の幸福を重んじる文化である。それに対し、集団主義の文化は、集団を優先させる。表2の中には示されていないが、日本文化は集団主義に属する。意見の不一致を公にしたり、直截的なディベートや対決はできるだけ避けようとし、協調性を重視する。また、仲間意識が強く、プライバシーを軽視するなどが日本文化（集団主義社会）の特徴である。

表2 [5]

個人主義	集団主義
United States	Venezuela
Australia	Colombia
Great Britain	Pakistan
Canada	Peru
The Netherlands	Taiwan
New Zealand	Thailand
Italy	Singapore
Belgium	Chile
Denmark	Hong Kong

授業では、日本人は、自分の意見をはっきり述べず、周囲の人々と同調しようとする傾向にあると言われていることを提示し、自分のコミュニケーションの形態はどうかを議論させればよい。例えば、自分は教師や目上の人に対して、個人的意見を述べられるか、面と向かって反対意見を述べられるか等を質問することが活動内容として考えられる。

3．2　平等主義

日本文化は、平等をあまり重視せず、序列を意識し、対人関係はタテ関係中心である。従って、平等を重んじる米国の文化と異なり、目上の人をファースト・ネームで呼んだりすることはしない。また、自分を謙遜し、自己卑下的な言語行動をとるのは、このタテ関係重視の価値観が背後にあるからである。

下に引用したような自分自身を謙遜する会話を提示し、このような言語行動をどう思うか、同じような状況で自分ならどう答えるかを議論させることが、指導例として考えられる。[6)]

Jonathan:　"Anh, your English is improving. I am pleased with your work."
Anh:　(looking down)"Oh, no. My Engish is not very good."
Jonathan:　"Why do you say that, Anh? You're doing very well in class."
Anh:　"No, I am not a good student."
Jonathan:　"Anh, you're making progress in this class. You should be proud of your English."
Anh:　"No, it's not true. You are a good teacher, but I am not a good student."
Jonathan:　(He is surprised by her response and wonders why she thinks her English is so bad. He doesn't know what to say and wonders if he should stop giving her compliments.)

3．3　高コンテクスト vs 低コンテクスト

言語メッセージをどの程度明示的に相手に伝えるかは、文化によって異なる。米国などの明示的コミュニケーションを重視する文化（低コンテクスト文化）では、明確で直接的な言葉によるメッセージが好まれる。それとは反対に、日本などの非明示的コミュニケーション（高コンテクスト文化）に属すると分類される社会では、言葉によって伝えられるメッセージは制限され、また曖昧な表現が多く、非明示的メッセージから深い意味を「察し」なければならない。日本人の曖昧な表現が米国人に誤解されるのはこの文化的相違から生じている。

表3 [7)]

高コンテクスト文化	低コンテクスト文化
China	Switzerland
Japan	Germany
Korea	North America, including the United States
Most Latain American cultures	Scandinavian cultures
Southern and eastern Mediterranean cultures such as Greece, Turkey, and Arabia	

授業では下に示したような例を提示し、自分ならどの程度明示的に相手にメッセージを伝えるかを考えさせるなどの方法が効果的であろう。[8)]

Situation: A Chinese man, a factory worker, is talking to a friend about his American boss. "My boss told me that he wanted me to work overtime this weekend. I really don't want to because my brother is arriving from Taiwan on Saturday, and I haven't seen him in five years. I told my boss about my brother last week. When he told me he needed me to work overtime, I said, 'Yes,' but I was not very happy. I'm sure he could see how I felt. He should have remembered that my brother was coming."

3．4　P時間 vs M時間

"Monochronic" 時間は、あらかじめ設定されたスケジュールに従って行動したり、時間厳守に高い価値をおく。従って、人を待たせることは無礼か無責任の表れとして見られる。一方、人間関係や業務の完了に重点を置く "Polychronic" 時間は、時間の正確さにはあまり関心がない。ラテン・アメリカ諸国、中東諸国、東南アジア、フランス、ギリシアなどの文化がP時間に、北ヨーロッパ諸国、米国、ドイツがM時間に属する。現在の日本の時間認識はM時間が支配的であるが、生徒個々人に、迅速性・時間厳守を重視しているかどうかを問いかけることが指導例として考えられる。

3．5　親密性

このカテゴリーには、ほほえみ、接触、視線、対人距離、そして声の調子といった非言語的行動が含まれる。親密性の高い文化では、相手との身体的、心理的接近度が非常に近い文化である。日本は表4に示されているように、親密性の低い文化であるために、感情を表に出すことやアイ・コンタクトを避ける傾向にある。授業では、生徒個々人に、人とコミュニケーションする時に、どの程度相手と距離をとるか、視線を合わせるかなどを質問し、自分の親密性を評価させるべきである。

表4 [9)]

High	Low
Most Arab countries	Most of nothern Europe, including
Mediterranean region, including	Scandinavia, Germany, and England
France, Greece, and Italy	British-Americans
Jewish people from both Europe	White Anglo-Saxons
and the Middle East	Japanese
Eastern Europeans and Russians	
Indonesians	
Hispanics	

4．結び

本稿では、異文化間コミュニケーション能力育成のために指導すべき6つの重要項目を基準に、高校英語教科書を分析してきた。表1に示されているように、6つの項目に関して、どの教科書もある程度の指導が可能であることが明らかになった。しかし、自己のコミュニケーションの形態を含め、自文化及び異文化のコミュニケーションの形態の特徴を評価する能力育成に関しては、現行の教科書では不十分であることも、この分析から明らかになった。特に、個人主義－集団主義、平等主義、高コンテクスト－低コンテクストといった重要な価値観の相違や、その価値観と相関関係のあるコミュニケーション・スタイルの相違を認識させ、これらの相違を克服するための技能を育成することに適した教材が少ないことが示された。この問題を解決するためには、英

語教師がコミュニケーション形態評価の重要性を十分認識し、その指導方法を開発することが必要である。また、本稿では扱わなかった「オーラル・コミュニケーション A，B，C」についても、この授業でどのように異文化間コミュニケーション教育を行うかを検討することが、今後の重要な課題である。

注

1)『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』P11
2) 分析に使用した教科書は以下の通りである。([　] 内は引用の際の略号を示す。)
New Horizon，東京書籍，1995.［Horizon］
Creative，第一学習社，1995.［Creative］
Milestone，啓林館，1994.［Milestone］
Powwow，文英堂，1995.［Powwow］
Spectrum，桐原書店，1995.［Spectrum］
Royal，旺文社，1995.［Royal］
The New Age English，研究社，1995.［New Age］
One World，教育出版，1995.［One World］
3) サモーバー他（1983）では、異文化間コミュニケーション行為に影響を与える主要な文化パターンとして、①世界観 ②活動指向 ③時間指向 ④人間性指向 ⑤自己の認識 ⑥社会組織の6つを設定している。また、Andersen（1994）では、①親密性 ②個人主義 ③男性らしさ ④権力格差 ⑤高-低コンテクストの5つを設定している。
4) Ting-Toomey（1994）で述べられているように、低コンテクスト文化は個人主義的な文化によく見られ、高コンテクスト文化は集団主義文化と一致する場合が多く、2つをまとめて1つの特徴とみなすことも可能である。
5) Jandt,（1995），P. 193 より引用。
6) Levine, et al.（1987），P. 17 より引用。
7) Jandt,（1995），P. 202 より引用。
8) Levine, et al.（1987），P. 38 より引用。
9) Jandt,（1995），P. 192 より引用。

参 考 文 献

Andersen, P.（1994）"Explaining Intercultural Differences in Nonverbal Communication," In L. A. Samover and R. E. Porter（Eds.）*Intercultural Communication: A Reader*（7th ed.,pp. 229－239），Wadsworth.
バーンランド, D. C.（西山千，佐野雅子訳）（1979）『日本人の表現構造』サイマル出版会.
フェラーロ, G. P.（江夏健一，太田正孝監訳）（1992）『異文化マネジメント』同文館.
古田暁監修（1987）『異文化コミュニケーション』有斐閣選書.
ホール, E.，ホール, M.（勝田二郎訳）（1986）『かくれた差異』メディアハウス出版会.
ホフステード, G.（岩井紀子，岩井八郎訳）（1995）『多文化世界』有斐閣.
Jandt, F. E.（1995）*Intercultural Communication*, SAGE Publications.
Levine, D. R., J. Baxter and P. McNulty（1987）*The Culture Puzzle*, Prentice Hall Regents.
直塚玲子（1980）『欧米人が沈黙するとき』大修館.
西田司（1994）『異文化と人間行動の分析』多賀出版.
Sakamoto, N. and R. Naotuka（1982）*Polite Fictions*, Kinseido.
Samover L. A. and R. E. Porter（Eds.）（1994）*Intercultural Communication: A Reader*（7th ed.），Wadsworth.

サモーバー, L. A.,R. E. ポーター, N. C. ジェイン（西田司他訳）(1983)『異文化間コミュニケーション入門』聖文社.
佐野正之, 水落一郎, 鈴木龍一（1995)『異文化理解のストラテジー』大修館.
Ting-Toomey, S. (1994) "Managing Intercultural Conflicts Effectively," In L. A. Samover and R. E. Porter (Eds.) *Intercultural Communication: A Reader* (7th ed.,pp.360−372), Wadsworth.